

西尾市史だより

後田遺跡出土の
七面の鏡について

令和二年十月十七日に岩瀬文庫にて、後田遺跡出土の海獸葡萄鏡一面の資料調査をする機会を頂きました。この鏡は幸田町在住の小野伸之氏から昨年九月に西尾市に寄贈されたもので、小野氏の祖父である宗重氏そうじゅうが、大正十二（一九二三）年に旧所有者であった三輪太右門氏（当時、吉良町宮崎の区長）より譲り受け、父の利郎氏、そして伸之氏へと三代受け継がれたものとのことです。私にとっては、後田遺跡出土鏡と伝えられる合計七面あるうちの最後に調査が叶えられた鏡であり、大変光栄なことです。



写真：後田遺跡出土の海獸葡萄鏡

思いました。

小野氏旧蔵の鏡を実際に手に取って観察してみると、鏡背面の中央には伏獸鈕（獸が前肢を前に投げ出して伏臥する形のつまみ）が配置されており、その周りを連珠文界圈（小さな珠文が巡らされた凸線）で内外区に分けられています。内区には葡萄と獸が五体、外区には葡萄唐草文と鳥、外区外縁には朶雲（垂れ下った雲）文列が見られます。

この種の鏡は古くから海獸葡萄鏡と呼ばれています。古代中国の唐代（七世紀後半から八世紀）に盛んに作られて日本に舶載されたものや、国内で模倣されて作られた鏡で唐式鏡と総称される鏡の一種です。この海獸とは外来の獸を指す言葉で、中国の伝説上の生物である狻猊さんげいのことを意味しています。

鏡をひっくり返して反対側の鏡面を見てみると、姿見ができる程に光を反射する鏡面とはなっていないのですが、鈍く光る銀灰色をしています。錫を多く含む白銅質の精良鏡であるように思えます。鏡面の中央側には細かな傷がたくさん見えますが、これは最初に所蔵した三輪氏が文鎮として使用した痕跡なのでしょう。また、ヒビ割れを修復したかのような鑄造時と思われる直しの跡が一条見て取れることから、踏返し鑄造（元の鏡を粘土に押し付けて型を取って鑄型を作る方法）による元の鏡の傷が転写されたものであることが推測されます。

鏡の大きさは、面径十三cmで、唐式鏡としては多数を占める中型鏡と言えます。重さは手に取るとずしりと重く、秤で測ると七三二gあります。鑄上がりが良いので、葡萄の粒が識別できる程で、肉厚で立体的な仕上がりです。

この鏡が出土したのは西尾市西幡豆町四八番地（後に後田遺跡と名付けられる）であったことが伝えられており、鏡の納められている木箱の中には、「小野宗重氏海獸ブドー鏡」と記された付箋と、この鏡に関する鑑定内容が黒インクでペン書きされたメモが同封されています。

メモの表面には、「本鏡 直径四寸三分／周縁厚サ四分一厘／鏡面ノ外反リ七厘／縁内斜面ノ花紋 四十四箇／東大寺法華堂天蓋海獸葡萄鏡／直径四寸四分八厘、厚サ四分二厘、／関信太郎氏蔵同前鏡／直径四寸／周縁厚四分／大和国葛城山麓宇智村／大字西久留野発見同前鏡／直径四寸六分三厘／周縁厚サ三分／鏡面外反リ七厘」、メモの裏面には、「宮内省諸陵／愛知縣幡豆郡西幡豆発掘鏡ノ内／一面（海獸葡萄鏡）／直径四寸六分／周縁厚サ三分／昭和六、五、三〇、博物館ニテ実測／同鏡ハ技工本鏡ニ比シ拙劣ニシテ金／色相違入」と記されています。

このメモの筆跡の特徴を観察すると、仏教考古学を大成されたことで知られる



石田茂作氏(岡崎市矢作町出身)によるものと思われます。石田氏は大正十四(一九二五)年から昭和三十二(一九五七)年まで東京帝室博物館(現在の東京国立博物館)に所属しているのですが、昭和六年五月三十日に、宮内省諸陵寮(現在の宮内庁書陵部)に移管されていた、小野氏旧蔵の鏡とは別の後田遺跡出土の海獣葡萄鏡の資料調査を行っていることが知られます。

後田遺跡から鏡が出土したのは、明治二十一(一八八八)年六月二十三日までさかのぼるのであり、その後の成り行きまで追跡調査した内容が、小野宗重氏によって『古墳記』と題した調査記録にまとめられています。

西尾市西幡豆町後田四八番地の土地(発見者の中根孫助氏の所有地)で宅地を畑に換える土取り作業をしていた時、地下約六〇cmの所から全部で五面の古代の鏡が出土し、その後、東京帝室博物館、宮内省諸陵寮へと移管されるに至る経緯が詳しく記述されています。また、これとは別に二面の出土鏡(海獣葡萄鏡)が骨董屋に流れて、その内の一面は岡崎市内にある寺院の先々代の住職が東幡豆町の妙善寺で住職をしていた時に入手して、現在は岡崎市

美術博物館に寄託されています(岡崎市指定文化財)。そして、もう一面が三輪太右工門氏から小野宗重氏に引き継がれ、利郎氏、伸之氏へと三代伝えられた後、西尾市に寄贈されるのです。

後田遺跡の出土鏡については、その所蔵関係者に三つの流れがあることがわかりましたが、同時にこの出土鏡にまつわる多くの考古学・博物館関係者の関わりがあったことがわかってきました。その詳細については未だ調べが不十分ですが、主な事柄をかいつまんで紹介しておきたいと思っています。

大正十一年夏に、小野宗重氏が三輪氏から借り受けた鏡を携えて東京帝室博物館に高橋健自氏(考古学会を主催した博物館学派の重鎮)、後藤守一氏(後に明治大学考古学研究室を創設)を訪ねています。博物館所蔵の五面と合わせて六面を実際に見較べて、「本鏡及他ノ五面皆錫ノガンユウリヨウ差アリテ金味ヲ異ニシテイルガ本鏡ハ錫ノ含有量モ多ク図柄及鑄造技術モ優秀デアル」とのコメントを受けています(『古墳記』より)。

大正十一年の暮れには、「高橋先生ノ依頼ニ依リ西幡豆出土地ノ調査ヲ行ヒ、十一年ノ暮参謀本部ノ地図

及現地見取図ヲ添エテ報告ヲシタ、コノ報告ハ後藤守一氏ガ整理シテイル」と、『古墳記』に記されています。

昭和六年十二月十五日に刊行された『考古学雑誌』(第二十一巻第十二号)に、後藤守一氏が「本邦出土の唐式鏡」と題する唐式鏡を総括した論文をまとめており、この中で「某氏蔵の海獣葡萄鏡は、径十三糎、前に挙げた諸陵寮所蔵のものと、大體に於いて背文を等うしているが、細部に於いて異にするところもあり、かつ白銅製の精良な鑄上りとなつてゐる」と述べています。

昭和三十五年には、奈良遷都千二百五十年を記念して奈良国立博物館において『天平地宝展』が開催されています。多数の国宝・重文と共に小野氏旧蔵鏡が展示され、奈良国立博物館長に転任していた石田茂作氏等により解説図録が執筆されています。

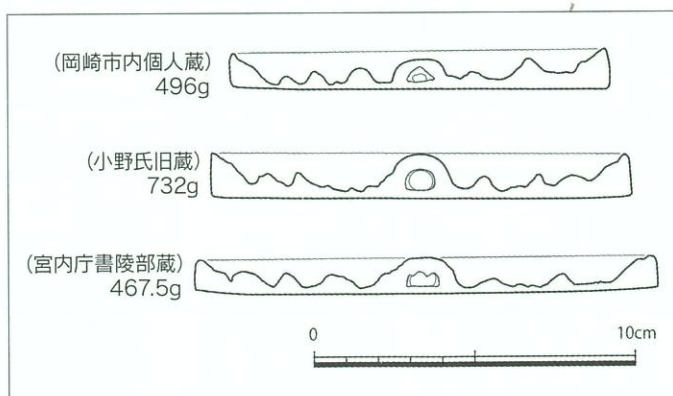
昭和五十一年には、熱田神宮宝物館で催された『愛知の古鏡展』で、宮内庁書陵部所蔵鏡の五面が展示されています。

平成六年には、名古屋市博物館で特別展『発掘された東海の古代』が開催され、宮内庁書陵部所蔵鏡の五面が展示されています。(当時、私は特別展の補佐を担当して、初めて後

田遺跡出土鏡に遭遇しました。)

近年では、平成二十年と平成二十三年に刊行された『幡豆町史』の資料編と本文編に、後田遺跡に関する詳細が報告されています。

後田遺跡出土の七面の鏡については、これまで小野宗重氏をはじめとする多くの関係者を惹き付けてきた尊い文化財であることがわかってきました。これから少しでも後田遺跡出土鏡に関する情報を追跡したいと思っています。



図：後田遺跡出土の海獣葡萄鏡3面

美術工芸・建造物部会

特別執筆員

野澤 則幸

こちら 考古部 です。

考古部会 編集委員

加藤 安信

内外から高く評価されてきた昭和四十八年刊の『西尾市史一 自然環境原始古代』は、当時の全国的な地方自治体史作成の水準もあつて、資料編と本文編が合体した構成になっています。一方、今回の新編西尾市史では資料編と通史編が別になりました。

考古部会では現在、平成三十一年に刊行した『資料編1 考古』所収の遺跡資料などに依りながら、地域の旧石器時代から近世までの歴史を分担執筆中です。考古学者の中には、「遺跡や遺物は雄弁に物語っている」と述べる方もおられますが、遺跡や遺物は沈黙を保ったままで、決して雄弁ではありません。あくまでも寡黙です。雄弁であらねばならないのは、遺跡の発掘調査を担当し

た調査員、考古資料を調査研究する考古学者の方です。市史作成では、遺跡の属性である遺構と遺物を基本資料として、いつ、どこで、どのような生活や社会・文化が営まれていたのか、という読者の疑問に答えるようなかたちで地域の歴史を叙述していくことが求められます。しかし、この作業は容易なことではありません。

遺跡資料に基づいて通史を書く場合に、考古部会として注力したい論点を幾つか挙げてみます。まず旧石器時代では、西尾に人が住み始めたのはいつ頃かという問題があります。資料が極めて乏しいものの、吉良町瀬戸の寄名山遺跡でナイフ形石器が発見されたことにより今から三万年くらい前まで遡ることが分かってきました。縄文時代の人々の暮らしや習俗については、三河湾沿岸部で大いなる繁栄をみせた後期の八王子貝塚と晩期の枯木宮貝塚から描いていくことができます。とくに全国的にも類例が少ない枯木宮貝塚の盤状集骨葬からは、縄文

時代人の葬送や死者に対する特異な考え方について描出することができるとでしょう。

次の弥生時代では、西幡豆町江尻遺跡でいち早く環壕集落が築かれたにもかかわらず弥生文化が順調な広がりをを見せていなかった現象から、三河以東の地における弥生社会の特質と問題点について描いていくこととなります。また岡島遺跡の発達、岡山丘陵上の後期の中根山遺跡などの環壕集落や東幡豆町上畑山遺跡の高地性集落から、緊張感が高まった弥生時代後期～終末期の社会の様相についても触れていきます。

古墳時代では、岡山丘陵の吉良八幡山古墳や善光寺沢南古墳から時代の始まりを捉え、羽角山古墳群や佐久島の古墳などから時代の終焉を考えていきます。中でも、吉良から幡豆にかけて築かれた正法寺古墳、岩場古墳、中之郷古墳、とうてい山古墳へと続く首長墓系譜の問題は、三河湾の海上交通路掌握の問題と絡めて捉えていくことになるでしょう。また西幡豆町西川原1号墳

出土の帯金具と畿内系土師器については、律令期の官制との関わりを示す貴重な資料として位置づけ、叙述を進めます。

さらに古代～近世では、鳥羽町の鳥羽神宮寺跡や北迫古窯跡出土の瓦から仏教文化の伝来、八ッ面山北部の古代集落跡から熊来郷の姿、室遺跡の木樋から新田開発の具体的な姿などの問題に言及し、文献史料から描かれる歴史に対して、リアリティーを与えるような記述を行っていく予定です。



枯木宮貝塚の盤状集骨葬人骨

資料紹介

宮崎村文書

近世部会 調査員

安藤 幸子

令和二年度購入資料の近世文書の中から、宮崎村(現吉良町宮崎)の難船(船が風波などのために破損・転覆・沈没すること)にかかる文書五通(次ページ表①～⑤)をご紹介します。

これらの史料は、嘉永六(一八五三)年七月、三州宮崎村の沖合船頭(船長として実際に船に乗り込む運航責任者)の平三郎が、勢州桑名の問屋から遠州へ商人の荷物(米三五〇俵、荷主は遠江国二俣村升屋半兵衛・江戸屋藤兵衛)を運送中、勢州答志島(現鳥羽市答志島)で難船したと偽り、積荷を横流ししたと思われる事件に関するものです。

答志島は鳥羽港の北東に位置する鳥羽湾の島で、熊野灘や遠州灘へ向かう際の岐路にあたります。難船に関する江戸時代の史料も多く残されています。

一般的に船が難破すると、積荷や船道具が船内に散乱したり、散逸した

りして周辺の浜へ漂着します。その片付けのために人足を集めたり、積荷損害の内訳を確認したりと海岸沿いの村には大変な負担がかかります。こうした処理が済むことを「船仕舞」とか「浜仕舞」といい、難船証明書である「浦手形(浦状)」が出されました。

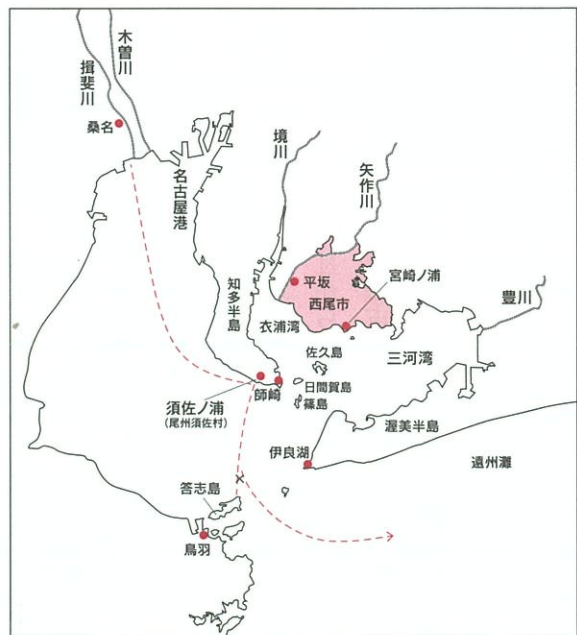
さて、平三郎の船が答志島で難船したことについて、一旦は「浜仕舞」となりますが、「難船之始末不審」であるとして翌年二月、荷主側が平三郎の住む宮崎村の領主の陣屋である小牧陣屋へ訴訟します。その済口証文(和解時に当事者が取り交わす証文)が①②です。

①⑤の五通の史料から平三郎船の難船について、「取扱人」となった佐久嶋村庄屋の茂兵衛・佐右衛門が調べたところ、当の平三郎は逃走し行方不明というので、平三郎の親類が弁償金一一〇両を支払うことになったこと、同時に尾州須佐村(現知多郡南知多町)の喜四郎・喜太郎が平三郎の「不埒」(道理にはずれていてけしからぬこと)に関与し、喜四郎・喜太郎も弁償金一四〇両を支払うことで決着したことが読み取れます。これらを合わせて考えてみますと、おそらく平三郎は途中、

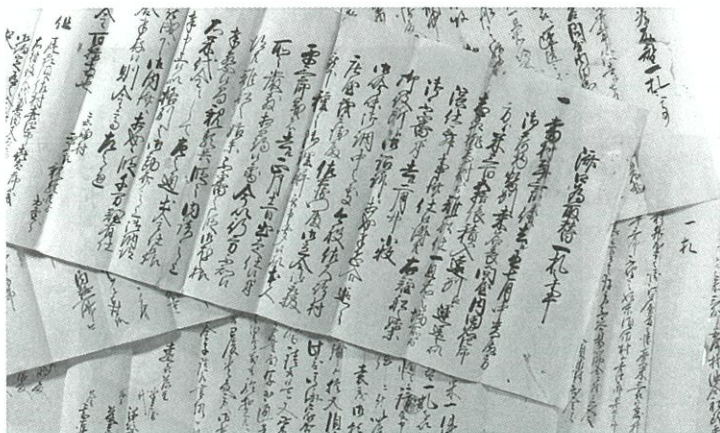
須佐の浦で喜四郎・喜太郎を共犯として積米を横流ししたものと推測できます。

さらに④では、須佐村喜四郎・喜太郎に弁償金一四〇両で示談が調つていたのに、あれやこれやと約定に背くことがあったようで、荷主藤兵衛の依頼により加藤平左衛門が仲裁し、支払いは「最初の趣意」に基づき、変わらず一四〇両となったことが書かれています。結局のところ、この件については、荷主が平三郎側より一一〇両(この請取書が③)、喜四郎・喜太郎側より一四〇両(この請取書が⑤)、合わせて二五〇両を積米の弁償金として受け取ることで合意しています。

平三郎船の進路を地図に落としてみますと、勢州桑名(米積込)→尾州須佐村(降米)→志州答志島(難船)→遠州(本来の目的地)と動いています。三河湾から伊勢湾を舞台とした海の世界の広がりや、あらためて感じるができます。



宮崎村文書に見る平三郎船の進路



購入した文書

宮崎村文書のうち難船にかかる文書

史料名	年月日	差出	宛所
① 済口為取替一札之事	嘉永7年5月	宮崎村庄屋甚七・組頭文三郎・伝七・金三郎・藤蔵・平三郎親類兵助・喜兵衛・七郎平・吉右衛門	遠州二俣村荷主弥次郎殿・藤兵衛殿・庄屋甚右衛門殿
② 済口為取替一札之事	嘉永7年5月13日	荷主半兵衛代弥次郎@・藤兵衛@、名主甚右衛門@	三州宮崎村庄屋甚七殿・組頭文三郎殿・伝七殿・金三郎殿・藤蔵殿・兵助殿・喜兵衛殿・七三郎殿・吉右衛門殿
③ 済口金請取之事 (110 両)	嘉永7年6月7日	遠州荷主半兵衛代弥次郎@、荷主藤兵衛@、名主甚右衛門@	宮崎村名主甚七殿・組頭文三郎殿・伝七殿・金三郎殿・藤蔵殿・平三郎親類兵助殿・喜兵衛殿・七三郎殿・吉右衛門殿
④ 一札 (遠州升屋半兵衛・江戸屋藤兵衛・米三州宮崎村沖合船頭平三郎不埒之始末につき約定証文の写)	嘉永7年6月	遠州豊田郡二俣村升屋半兵衛代弥治郎・同断藤兵衛・知多郡須佐村喜四郎・同断喜太郎、二俣村名主甚右衛門、須佐村名主源兵衛、同浜年寄衆之進	(鳴海宿) 加藤平左衛門殿
⑤ 一札 (済口金 140 両請取につき)	嘉永7年6月	遠州豊田郡二俣村半兵衛代弥次郎・藤兵衛、名主甚右衛門	知多郡須佐村喜四郎殿・喜太郎殿・七五郎殿、右村 (須佐村) 御役人中

主な活動記録

(令和2年4月～令和3年1月現在)

● 編集委員会 6月 (書面表決)

● 考古部会 7月 (書面報告) ・ 11月28日 (リモート)

● 調査

● 「通史編1 原始・古代・中世」の執筆

● 調査

6月 巨海遺跡出土資料

7月～10月 のべ6回 枯木宮貝塚出土資料

9月 西幡豆町採集資料

11月 志貴野廃寺出土瓦

12月 江尻遺跡出土資料

● 古代・中世部会

● 「通史編1 原始・古代・中世」の執筆

● 調査

8月8日 肥前島原松平文庫 (中世)

9月27・28日 姫路市立城内図書館・城郭研究室

12月26日 刈谷市歴史博物館 (中世)

● 打合わせ

10月11日 (古代)

10月24日 (中世)

● 関連行事

10月3日～1月31日 刊行記念特別展「西尾の古代・中世―吉良荘と吉良氏の光芒―」
(於 岩瀬文庫)

● 近世部会

● 「資料編3 近世1」の執筆・編集

● 調査

10月30日 岡山大学附属図書館・三浦家文書

(岡山県岡山市)

11月12日・13日 長谷川治郎兵衛家文書

(三重県松阪市)

● 寄託・寄贈文書調査・整理

4月～12月 のべ52回 伊藤家文書 (肴町)、

豊岡新田文書 (吉良町)、青山家文書 (戸ヶ崎

町) ほか



長谷川治郎兵衛家資料撮影



●翻刻

4月～12月 岡山大学三浦家文書・養寿寺文書
ほか

●近・現代部会

●部会

9月11日(リモート)

●寄託・寄贈文書整理・調査

4月～12月 のべ43回 外山竹右衛門家文書
(寺津町)・大竹家文書(吉良町津平)・旧町
村役場文書ほか

●自然部会

●調査

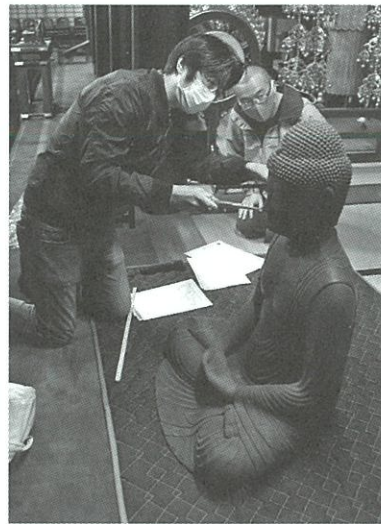
市内の地質・気象・植物・動物(哺乳類・鳥
類・爬虫類・両生類・魚類・軟体動物・昆虫・
蜘蛛など)

4月 のべ18回
5月 のべ24回
6月 のべ20回
7月 のべ24回
8月 のべ35回
9月 のべ18回
10月 のべ19回
11月 のべ18回
12月 のべ28回

●美術工芸・建造物部会

●彫刻班会議

8月29日(リモート)



養国寺彫刻調査

●調査・撮影

7月30日 養国寺(寺津町) 絵画
9月10日 専長寺(吉良町吉田) 彫刻
9月24日・25日 長圓寺(貝吹町)・養寿寺
(下矢田町) 絵画
10月17日 後田遺跡出土海獣葡萄鏡 工芸
10月23日 紅樹院(上町) 絵画
11月6日 八剎社・神明社・佐久島東公会堂・
阿弥陀寺(佐久島) 建造物・彫刻
11月19日 寺津八幡社 工芸

●民俗部会

●部会

9月9日・12月2日

●調査

・イトトウ等の実態調査
・茶栽培調査
・三河万歳調査
・夏越の祓い・鰻・海苔調査
・新田開発とムラ実態調査
・漁業関連調査
・力石調査
・旧糟谷邸民具調査
・養鰻調査
・災害記念碑調査
・弘法信仰・秋葉信仰・庚申信仰・白山信仰・
地藏信仰・薬師信仰・熊野信仰
その他、聞き取り調査等
4月～12月 のべ189回

調査にご協力いただいた皆さま、
情報をお寄せいただいた方々へ
心より感謝を申し上げます。



『新編西尾市史 資料編2 古代・中世』 刊行記念行事

西尾市岩瀬文庫特別展

『新編西尾市史 資料編2 古代・中世』 刊行記念

吉良氏800年祭

「西尾の古代・中世—吉良荘と吉良氏の光芒—」

令和二年五月に頒布が開始された『新編西尾市史 資料編2 古代・中世』では、一五〇〇を超える歴史資料を収載しています。古代・中世の西尾をより身近に感じていただくため、掲載資料を中心に特別展を行いました。とりわけ当地由来の武士・吉良氏や吉良荘（西尾市の西半分に相当）に対する理解を深めます。

※光芒とは？ 「吉良」とは当地産出の鉱物雲母（うんも）がキラキラ輝くことに由来します。本展示で明らかにする吉良氏の歴史的な軌跡を、「光芒」＝「慧星の光の軌跡」になぞらえています。

会 期 10月3日～1月31日

会 場 西尾市岩瀬文庫 2階企画展示室

展示解説 10月31日、11月14日

※参加人数32名

【展示構成】

一章 西尾の古代 —吉良荘 誕生—

古代資料を中心に展示。吉良荘の成り立ち

を理解していただきます。

二章 実相寺と吉良氏 —三河禅宗文化の中心—

三河臨済宗寺院の古刹・実相寺から南北朝時代の優品を多数展示し、合わせて庇護者の吉良氏との関わりについて触れます。

三章 吉良と今川

足利一門の中で吉良氏が高い家格を有していたことを示します。合わせて西尾地域由来の武士で一族の今川氏も触れます。

四章 戦国乱世 —吉良氏の衰退と「西尾」の誕生—

支配者が頻繁に交替する様を、市内に残る古文書から示します。合わせて戦国時代の軍事的な重要性から「西尾」が生まれてきたことを示します。

五章 中世の西尾に生きた人々

古文書・仏像・絵画などを通して、中世の西尾に生きた人々の足あとを追います。

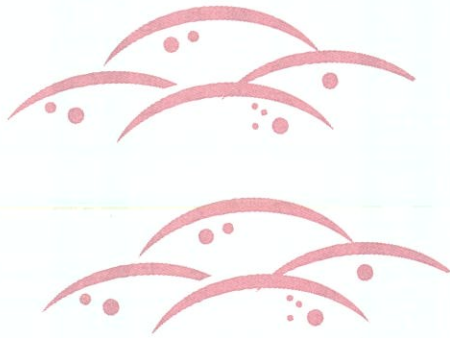
【主な展示品】

篠島の木簡（奈良時代、レプリカ「平田市立博物館蔵」）、大般若経（長寛二年「一一六四」銘、竜蔵院蔵）、一条経通御教書（建武五年「一三三八」、実相寺蔵）、三牌（南北朝時代、実相寺蔵）、木造釈迦如来坐像（貞和二年「一三四六」、願成寺蔵）、吉良満貞願文（貞治元年「一三六二」、実相寺蔵）、養寿寺本 吉良氏系図（養寿寺蔵）、吉良義信書状写（文亀から永正年間、岩瀬文庫蔵）、今川義元書状（パネル、弘治元年「一五五五」、江川文

庫蔵）、今川義元判物（永禄元年「一五五八」、法光寺蔵）、銅造鰐口（永禄七年「一五六四」、御剣八幡宮蔵）、吉良義昭カ袖判判物写（永禄8年「一五六五」、鈴木家文書）、円光禅師可庵和尚塔銘牌（パネル、応永二十三年「一四一六」、願成寺蔵）、蓬萊鏡（暦応四年「一三四一」、寺津八幡社蔵）



岩瀬文庫特別展のようす





刊行物のぞく案内

刊行予定

『新編西尾市史研究』第七号

A4判 令和三年四月上旬刊行予定

ただいま編集集中!

市史編さんの過程の調査・研究の成果をいち早くご紹介します。

(内容)「地域社会の近代化と農民の『日常』」
「幡豆郡幡豆村七番組『牧野日記』をとおして(完)」
「愛知県打瀬網漁業と『朝鮮通漁』」
「スジアオノリ、ヒラアオノリ等海藻の名付け親、名倉閣一郎氏」
「西尾藩領長繩村観音寺の清康公墳墓発掘について」
「災害とくらしー西尾における災害碑等の悉皆調査よりー」(予定)

既刊

『新編西尾市史研究』第六号

A4判 146頁 700円

既刊

『新編西尾市史研究』第五号

A4判 90頁 500円

既刊

『新編西尾市史研究』第四号

A4判 120頁 700円

既刊

『新編西尾市史研究』第三号

A4判 110頁 700円

既刊

『新編西尾市史研究』第二号

A4判 76頁 500円

好評頒布中

『新編西尾市史 資料編1 考古』

縄文時代から近世まで三七三か所の遺跡と出土遺物を収載しています。

A4判 790頁 オールカラー

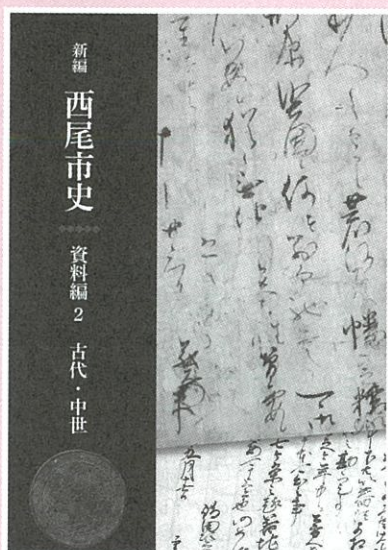
西尾市の遺跡位置図付 5000円

『新編西尾市史 資料編2 古代・中世』

一五〇〇を超える歴史資料を収載しています。

A5判 口絵付 760頁

本文収録CD・ROM付 4000円



いずれも岩瀬文庫休憩室などで頒布しています。通信頒布については、市史編さん室のホームページ(「西尾市史」で検索)をご覧ください。

資料や情報をお待ちしています。

西尾の歴史や文化、風土に関する資料がありましたら、お知らせください。今後の市史編さん活動に役立てます。

・古文書や古い日記など
・戦前の市内で刊行された雑誌

自然調査にご協力ください。

(1) 市内のヒキガエル・イモリ・タケクマバチ・セアカゴケグモ・フクロウ・アオバズク・化石などに関する情報を集めています。詳細は市史編さん室のホームページをご覧ください。

(2) 魚類について、川・海を問わず珍しいものを見かけた場合は市史執筆員が所属する碧南海浜水族館(〇五六六―四八―三七六一)まで情報をお寄せください。

担当・お問い合わせ

西尾市教育委員会文化財課市史編さん室

〒四四五―〇八四七

西尾市亀沢町四八〇 西尾市岩瀬文庫内

TEL 〇五六三―五六―八七一

FAX 〇五六三―五六―二七七八

E-mail shishi@city.nishio.lg.jp

新編西尾市史だより第七号

令和3年2月1日発行